

お念仏申してわしが喜ぶと

1、雪の朝

昨夜の雨が0時過ぎごろから雪になった。久しぶりの雪である。
昨夜は、風もあってなかなか寝つけなかった。



今日は念仏を教えて下さった方の葬儀。

朝起きたら、50cm以上積もっていた。除雪機を動かそうと思って、スイッチを入れたらエンジンがかからない。バッテリーがあがっていた。

暮れに動かして以来、動かさなかったのも、あがってしまったのだろう。

親父がデーに行くので、とりあえず車いすが入るように人力で道をあけた。

バッテリーを車とつなごうと思ったら、ハイブリッドなのでできないことに気がついた。

近所の方に助けていただき、車のバッテリーとつないでエンジンがかかった。

いつも泥縄である。

2、念仏を癖にする

念仏は誰でもいつでもどこでも称えられる最も簡単な行である。

ところが、これを口癖にして称えている人は、なかなかいない。

最も簡単な行なのに、**最も難しいのだ。**

なぜか。それは、念仏があまりに簡単な行だと思われているからだと思う。

でも、それは現代では最も難しい行となってしまった。

亡くなられた善知識の方たちがよく言われていた。
子どもの頃、朝夕正信偈を称えないとご飯を食べさせてもらえなかったと。
そして、その親から、念仏だけは決して絶やすなと言われていた。
念仏こそが相続できうる最も大切なものであると。そして、相続＝念仏であった。

ありがたや 我も一世の 相続を

念仏は簡単だから称えることができると思っても、念仏を癖にすることは難しい。
癖になってやっと仏からの念仏の声が聞こえるようになる。
そういう念仏が癖になっておられた方たちが、だんだんとお浄土に還られてゆく。



3、介護の貴重な記録（語録）

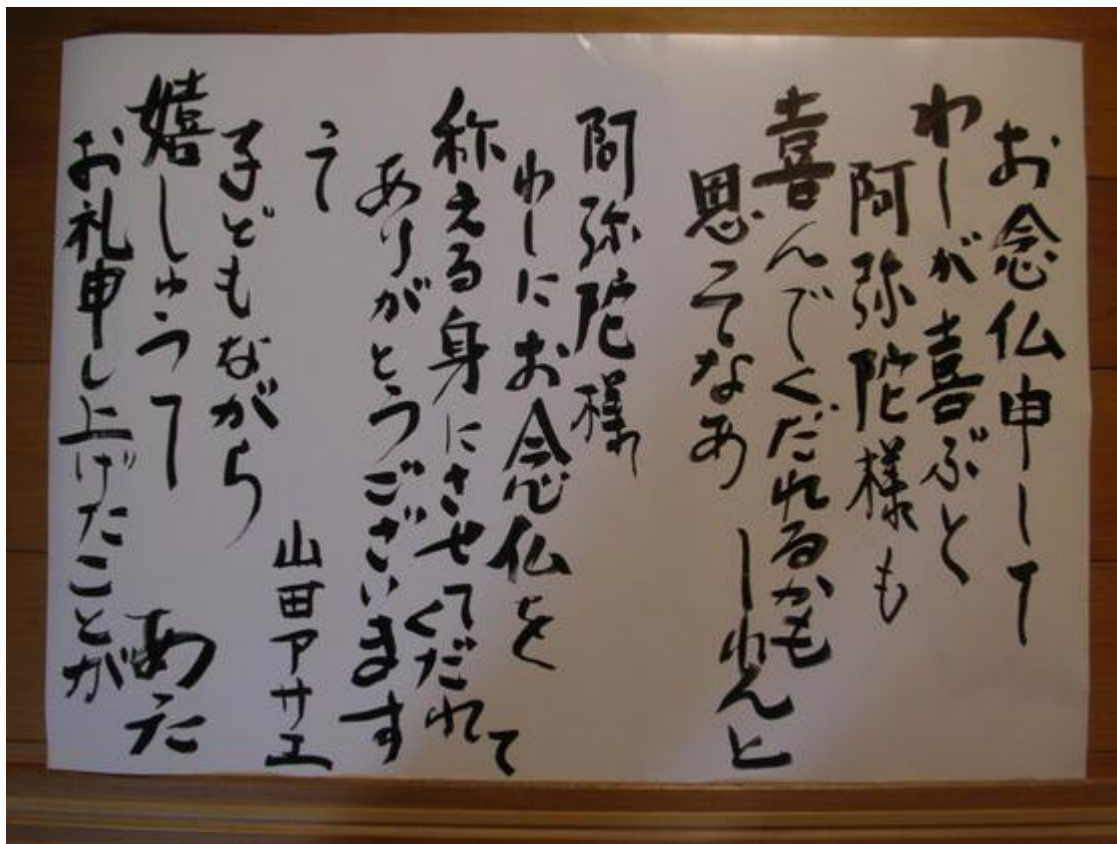
昨夜、七日のお勤めで貴重な記録をいただいた。

介護の傍ら、義母が意味のわからないことをつぶやくのを聞いていた。
同じことを何度も繰り返す、突然で前後のつじつまはあわない・・・
でも、よく聞いていると、大事な言葉ではないかと気がつき、記録を始める。
忙しい仕事と介護の合間を縫って。
こういう記録をとっておこうとされたお気持ちが自然と伝わってくる。
帰ってから、読んでいて何度も何度も涙が溢れてきた。
こうやって文字になると、故人の人生が自然と浮かんでくる。

そういえば、数年前に長年連れそった夫が亡くなったとき、七日のお勤めで私の祖父の話をされた。「欣浄さんに、嫁に来た時になあ、お東の読み方とお西の読み方は違うからと丁寧に教えてもらった。優しい人じゃった。」

この話を何回も何回も繰り返し話された。祖父は私が生まれる前に亡くなったが、不思議なことに遇っていない祖父のイメージが浮かんでくるようになった。

この仏の言葉を知ってほしいと伝道掲示板に書きとめた。



このような言葉がどうして呆けた老人の口から出てくるのだろうか。

「わしが喜ぶと阿弥陀様が喜んでくだれるかもしれん」

最初、どういうことだろうかわからなかった。でも、頭でわかるより先に涙が溢れてきた。

「子どもながらに嬉しゅうてお礼申し上げたことがあった」

この喜びを八十数年も忘れずにいたこと

そして、最後まで、お念仏を称える身にさせて頂いたことを感謝していたこと

この言葉が生きていること

4、お母ちゃん いつも言っていたね 「お念仏申そうか」

(これは尊い記録の題です)

「お念仏申して わしが喜ぶと 阿弥陀様も喜んでくだれるかもしれんと思ってたなあ。阿弥陀様、わしにお念仏を称える身にさせてくだれて ありがとうございますって、子どもながら嬉しゅうて お礼申し上げたことがあった。」(山田アサエさんのお言葉より)

最初読んだ時、どういう意味か理解できませんでしたが、考える前に涙が溢れてきました。

「子どもながらに嬉しゅうてお礼申し上げたことがあった」

子ども心でどうしてこのような思いが出てくるのか。(お聞きすると、小さいうちに日曜学校でお寺に通い聴聞されていたそうです。)

この喜びを八十数年も忘れずにいたこと。そして、最後まで、お念仏を称える身にさせて頂いたことを感謝していたことを。この言葉が今もしっかりと生きていることを。

かつて、私たちの先祖がこうやってお念仏を相続してきたことを思うと、我が身の情けなさに思い至ります。念仏の道とはどういう道であったのか。その道を歩んでこられた方たちが私に示してくださっていたのに。

そのことに気がつかない凡愚でした。やっと気づいて同じ道を歩ませていただくことを、そして、その道はお浄土に確実に至る道であること、お浄土で相まみえることを共に喜びたいと思います。

「あー もったいないと 思って

阿弥陀様 このわしみたいな 強情なものをなあ

こんなわしでも 思いだいてやあ お念仏申させてもらうことは

もったいない ありがたいこっちゃ」

時々口から出てくるお念仏は、阿弥陀様が思い出して下さるから

思い出してお念仏させてもらえる。それをありがたいと思えるところ。

「ふいつと おかしな心が おこったことでも

お念仏が出てくだれるで ありがたい

こんなこと言やあ 阿弥陀様に 申し訳ない 思ってなあ」

お念仏が出てくださる。阿弥陀様が出て下さる。他力の思想の窮まった姿がここにある。

「お念仏が出てくださるのでありがたい」

阿弥陀様と一緒に生きぬいた生活だった。

「お六字だけに 支えられて 生きていける

ありがたい お念仏様が すっと出てくだれる とって ありがたい

やーれ 阿弥陀様なりやこそ」

こんな身体になってしまつてと嘆き、世話をかけるで申し訳ないと謝り、はようつれていって欲しいとつぶやき、もっと生きたいと言う。

愚痴も、感謝も、嘆きも、願いも、念仏と一緒に出てくる。

お念仏に支えられながら生き抜いた御生涯だった。

南無阿弥陀仏

5、「ありがたや 我も一世の 相続を」

と、親父が伝道掲示板に書いていた。
この「相続」を寺の相続、仏法の相続のことだと思っていた。
村田静照師の言行録を見ると、
「ご相続があつて、おもむろに口を開かれ」と書いてある。
ご相続の合間に法話をされたということ。
つまり、「相続」とはお念仏のことだ。

確かに、有形のものの相続よりもこの念仏の相続が最も価値がある。

「この八十過ぎまで 生きさせてもらった
お六字様だけ
そーやって ひぐらしさせてもらった
私の事 この婆のことを 思ったら お念仏 申しておくれ 」

私たちが、仏法を伝えていくことは、
仏の願いであり、十方の諸仏が讃嘆する念仏を伝えていくことであるが、
お六字様を称えてほしいと願うことは、
このような形でしか言えないのだろう。

「あんたは信心深い人やで良い死に方をさっせるやろう。」
と言われた方が、
「わしゃ死に方のことは知らん。生き方を教えてもらっとるんや。」
と言われたという。

まったく、信心とは生き方である。